2019 年度

経済学部

点検・評価報告書

（最終報告）

創価大学

目次

第 4 章　教育課程・学習内容（評価項目③④⑦：西田／評価項目⑤⑥：勘坂/評価項目⑥の一部：Yasuda）

第 5 章　学生の受け入れ（評価項目①：安武）

第 6 章　教員・教員組織（評価項目①：勘坂）

第 7 章　学生支援（評価項目②：増井）

第 9 章　社会連携・社会貢献（評価項目②：浅井）

第4章　教育課程・学習内容

（1）　現状の説明

点検・評価項目③：教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

評価の視点１：各学部・研究科において適切に教育課程を編成するための措置
評価の視点２：グローバル化に対応した学修プログラムの充実
評価の視点３：学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成する教育の適切な実施

経済学部では、「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー）で定めた7つのラーニング・アウトカムズを達成するために「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー）を策定し、7つの項目ごとに必修となっている共通科目並びに学部専門科目との関連性を具体的に明示している。さらに、ラーニング・アウトカムズがどれだけ達成されているかを、直接評価手法と間接評価手法を組み合わせて点検・評価している（資料4-X 「履修要項p.59-60.）。

教育課程の編成に際しては、授業科目の年次配置などで学生の履修に配慮した順次性と体系性を有する編成とし、学生が授業科目を履修登録する際の目安となる「履修モデル」を作成し、学生に配布する履修要項等の刊行物に収載している。また、授業科目の必修・選択科目の位置づけについても、「履修モデル」やそれに基づく「専門科目表」などにおいて明示している。とりわけ、学部専門科目については、基本となる知識・分析力の修得のために導入科目、基礎科目などを配置し、加えて、基礎的な知識の修得のうえに高い専門的な知識・分析力の獲得を目指す展開科目、そしてそれを補完する関連科目などから構成されている。さらに、各科目の分野や学修順序を示す科目ナンバリング制を導入するとともに、カリキュラム・マップおよびカリキュラム・ツリーを作成し、「学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー）に記載のラーニング・アウトカムズ該当項目「専門科目表」に組み込むことによって、各授業科目の到達目標を明示している（資料4-X 「カリキュラム・マップ」&「履修要項p.68-70.」）。

また、学生は2年秋学期（第4セメスター）の履修登録で、科目群（クラスター）を選択して登録する。すなわち、学生が「理論・統計学」「現代経済」「グローバル地域経済」の3つの科目群（クラスター）から1つを選び、自分の興味・関心のある専門分野をより深く学修することを可能にしている（資料4-X 「履修要項p.65.」）。

グローバル化に対応した学修プログラムの充実については、「(2)英語による経済学教育を通して、グローバル社会で役立つコミュニケーション力を備えた人材を育成する」という学部の教育目標を念頭に置きながら、「International Program」――通称「IP」――と呼ばれる、英語で専門科目の基礎を学ぶと同時に学術的な英語能力とディスカッション能力を養うプログラムを開講している。また、「English Medium Program」というすべての授業を

英語で実施するプログラムとして、経済学部では、SUCCEED (Soka University Courses for Comprehensive Economics Education)という卒業に必要な単位をすべて英語による授業で修得できるプログラムを開講している。さらに、「IP」を履修し終えた学生を中心に、一定の条件（TOFLEのスコアや通算GPAなど）を満たしていれば、英語で経済学の専門が学べるSUCCEEDの科目を履修することができる（資料4-X 「履修要項p.63-64.」)。

学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成する教育については、学部の教育目標に「問題発見・解決能力と論理的思考力を備えた人材を育成」「世界の平和と人類の幸福に貢献する人間力を備えた人材を育成」とあるように、社会の動向やニーズを見据えつつキャリア教育を推進している。学生は共通科目の「キャリア系教育科目」を選択必修科目（2単位以上）として履修するが、経済学部では、1年春学期に将来のキャリアを考え、その実現に向けて大学生活をデザインすることを目的とした「キャリア開発フォーラム」、あるいは、将来少しでも世界に関われる仕事をしたいと考えている学生を対象とした「ワールドビジネスフォーラム」の履修を、1 年次秋学期には、「自分」「社会」「仕事」をテーマに、自分で自分の将来を切りひらくための情報や考え方について学ぶ「キャリアデザイン基礎」の履修を推奨し、学生が早い段階から主体的に自分自身のキャリアについて考える機会を与えている。

経済学部では、インターンシップを、学生が職業適性や職業選択について主体的に考える機会であると同時に、企業等の現場で高度な知識・技術や複雑な諸問題に触れることによって主体的な学びの意欲を高める機会として重視している。たとえば、「いかに社会に貢献するか」をテーマとした「社会貢献と経済学」という授業を専門科目として配置し、座学だけでなく、実際に外へ出ての「東北復興スタディ・ツアー」や「東北復興インターンシップ」などの社会体験や就業体験の機会を提供している。

（資料4-X https://www.soka.ac.jp/economics/feature/volunteer/tohoku-study-tour）

（資料4-X https://www.soka.ac.jp/economics/feature/internship/tohoku-ip）

さらに、経済学部独自の取り組みとして、就業力を高めグローバル人材へのステップとなる約4週間の「クアラルンプール・インターンシップ・プログラム」とグローバル社会で活躍するための即戦力を高める約3週間の「香港インターンシップ・プログラム」を提供している。

（資料4-X https://www.soka.ac.jp/economics/feature/internship/kuala-lumpur）

（資料4-X https://www.soka.ac.jp/economics/feature/internship/hong-kong）

点検・評価項目④：学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

評価の視点１： 各学部・研究科において授業内外の学生の学習を活性化し効果的に教育を行うための措置

授業内外の学生の学習を活性化し効果的な教育を行うために、経済学部では、単位修得に必要な授業時間外の学修時間を確保して単位の実質化を図るための措置として、学期毎の履修上限単位数を20単位に設定している。加えて、成績優秀な学生の履修単位数の上限設定の緩和措置を設け、学期毎に最大24単位までの修得と、さらに上級年次の授業科目の履修を認めている（資料 4-X 「履修要項p.62.」）。

シラバスは、個々の授業科目の具体的な内容を学習方法や成績評価方法を含めて学生に明示すものである。シラバスは全学で統一されたフォーマットになっており、授業概要・到達目標、学部ラーニング・アウトカムズ（ディプロマ・ポリシー）との関係、授業計画・内容、評価・試験方法、評価方法、教科書、参考書、履修上のアドバイス、毎週の授業に必要な学習時間、アクティブ・ラーニング実施の有無、授業や自主学習支援にICTを活用するかどうかの有無、課題（中間試験やレポート等）に対するフィードバックの方法、授業で使用する言語、定員ならびに履修者選抜方法が記載されている。作成されたシラバスの記載内容については、学部長・副学部長を中心に学部執行部で点検を行い、不十分な場合は修正・加筆を求め、学生が不利益を被らないようにしている。

授業内容とシラバスの整合性の確認については、学期末に統一フォーマットで全学的に実施される「授業アンケート」により実施しているが、それに加えて、学部の選択必修科目（ミクロ経済学、マクロ経済学、経済数学入門、経済と歴史、基礎統計学など）については、アセスメント・ポリシーに基づき評価するとともに、学生がラーニング・アウトカムズ（ディプロマ・ポリシー）に示したさまざまな能力を、当該科目でどれだけ身につけることができたかをアンケートによって調査している（点検・評価項目⑥を参照）。

学生の学習を活性化するうえで、高校までの学びから大学への学びへの移行を円滑に図ることは極めて重要である。経済学部では、大学で学習を進めるために必要な基本的なスキルを身につけることを目標とした「初年次セミナー」を第1セメスターに配置している。これは、少人数（15名程度）で、双方向、かつ参加型の教育形態の授業科目で、ポートフォリオ講習、キャリアデザイン講習、学生生活ポリシーガイダンスのほか、文献資料の探し方、図書館の利用法、プレゼンテーションの仕方といった授業回を提供している。さらに、グループ学習やピア・ラーニングといった学生同士の学び合いを通じた学術文章作法（アカデミック・リーディングおよびアカデミック・ライティング）やアクティブ・ラーニングの一形態であるLTD（Learning Through Discussion／話し合い学習法）により学生の主体的な学びを促進している（資料4-X　初年次セミナーのシラバス）。

アクティブ・ラーニングの学部専門科目への導入も積極的に行われており、全学で作成さ

れた基準に照らして、演習などを除く 68 の専門科目が「良質な AL 科目」となっている（資料 4-X 「【経済学部】良質な AL 科目に関する資料」）。また、学生の学習を活性化させ、教育効果を高める取り組みとして、毎年秋に、研究論文の審査を通過した上位 10 チームによってプレゼンテーションが行われる「経済学部ゼミ対抗研究発表大会」を開催している。各ゼミの教員の指導のもと、サブゼミを持つなどして学生がゼミの仲間とともに自主的に研究に励むこの取り組みは、20 年以上続く（2019 年度は 22 回目）経済学部の良き伝統となっている（資料 4-X「『第 22 回経済学部ゼミ対抗研究発表大会』の大綱ならびに審査ルール」）。

授業形態に配慮した 1 授業あたりの学生数については、1～3 セメスターに配置されている学部の選択必修科目で比較的多人数の授業科目が存在するが（ミクロ経済学、マクロ経済学、経済数学入門、経済と歴史、基礎統計学など）、それでも同一科目を複数の教員で担当しているため、1 授業当たりの学生数は 50～100 名前後となっている。その他の 3 セメスター以降に配置されている専門の講義科目は、人数のばらつきはあるものの、100 名を越える授業は例外的で、講義科目の授業であっても 20～60 名程度の履修者数となっている。学部全体では、IP 科目（最大 20 名程度）や演習（最大 17 名）など比較的少人数で行われている授業がほとんどである。

適切な履修指導については、毎年 4 月の新入生ガイダンスと 2 年生ガイダンスの中で、いくつかの履修モデルを提示しながら丁寧に説明をしている。さらに教務課が実施している全学の履修相談とは別に、FEEL（Faculty of Economics Education Lounge）の名で親しまれている経済学部教育ラウンジでも学部教員と初年次セミナーの SA が新入生の履修相談会を行っている（資料 4-X 「新入生ガイダンス＆2 年生ガイダンス PPT」）。また経済学部ではアカデミックアドバイザー制を導入し、初年次セミナーの担当教員が専門演習が始まるまでの期間（1～3 セメスター）を、それ以降の卒業までの期間（4～8 セメスター）を演習担当の教員がアドバイザーとなって、学生の指導に当たっている。経済学部では演習が必修科目となっており、全学生がどこかの専門ゼミに所属することになる。アカデミックアドバイザーとなった教員は、自分が担当するゼミ生が向こう半年間の目標設定や学内・学外活動について記した「My Map」を手がかりに、学生と 1 対 1 の個別面談を実施している。このいわゆる「My Map 面談」は半年ごとに全部で 3 回行うことになっており、一人ひとりの学生の状況の把握に役立っている（資料 4-X 「MyMap 面談シート」）。

点検評価項目⑤：成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

評価の基準１：各科目の到達目標を明示し、その到達目標の達成度と成績評価の関係が明示しているか。 **評価の基準２：適切な成績評価が行われるように、試験レポートの難易度を適切に調整しているか。** **評価の視点３：主要な科目で、受講学生がどのような学習成果を修めることができるか明示されていて、受講学生が学習成果を修めることと、成績評価とどのように関連するかを明確に示しているか。**

経済学部では、各科目の到達目標をシラバスで明記し、B－以上の成績であれば、その到達目標が達成されたと考えられることを基準に成績評価を行っている。
また、各科目の成績分布は教授会で公表し、大学で定められた成績分布の基準（95 点以上[A+]が上位 5%、85 点以上[A－以上]は 25%）に適合しているかを検討している。そのうえで同基準から乖離した成績分布がある場合には、試験レポートの難易度を適切に調整するように求められる。

さらに、経済学部では、学位授与方針をももとに、各科目で身に付けることができる能力・ラーニング・アウトカムズ（以下 LOCs）を定め、かつそれを履修要項に明示している。このことによって、受講学生が各科目でどのような力を修得できるかを知ることができる。また、主要科目では、以下の様に、各能力がどのような授業内容によって修得できるかを明示し、成績が B－（2019 年度以前の入学生では B）以上であれば、同能力が修得できたと考えられることを基準に成績評価を行っている。

【ミクロ経済学】

ミクロ経済学では、社会現象を複眼的視点から論理的に理解･分析することができる力を養うために、日常の経済問題を理解するために必要なミクロ経済学の基礎理論を学び、またその理論を用いて政策提案を理解し評価する能力を養う。具体的には、需要・供給曲線を用いた市場分析や、基礎的な消費者理論・生産者理論の学習を通して日常の経済問題を理解する力を養成する。また、価格規制や課税といった政策が市場の成果にどのような影響を及ぼすか、政策の実施が経済厚生にどのような変化をもたらすかを学習するなかで、政策を理解・評価する力を養う。その達成度は、中間試験、定期試験において、世の中の出来事が均衡に与える影響、市場価格が消費者や生産者の意思決定に与える影響、および政府の政策が市場の成果や人々の厚生に与える影響を、複眼的視点から論理的に考察する問題を通して測定する。その結果、成績が B－（2019 年度以前の入学生では B）以上の学生は、上記の力の基礎を修得できたと考える。

【マクロ経済学】

マクロ経済学では、経済学を用いて、社会現象を複眼的視点から論理的に理解・分析することができる力を養うために、長期、短期の 2 つの視点から、いいかえれば古典派、ケインズ派という対立するアプローチから、マクロ経済学を整理し、各種の政策手段によってもたらされる経済効果の違いを学習する。グラフや数式等を用いた経済理論の学習を通し、論理的に理解し、分析する力を身につけるとともに、現実の統計データに触れることを通じて、数量的・統計的データを正確に理解することができる力を養う。

具体的には経済学部の初年次必修科目であるマクロ経済学では、まず基本的な専門用語を正確に理解させることからスタートする。これは各回の授業において用いられるキーワードについて事前に調べてくる予習課題を課し、授業のはじめには簡単なディスカッションさせたうえで、講義を進める。そして各章が終わるタイミングでキーワードについて小テストを行い、専門用語に対する正確な理解度を測定している。

次にマクロ経済理論を論理的に展開し、理解・分析することができる力を身につけられるように、講義内ではグラフや数式等を用いて学習する。そのうえで数値例にもとづいて、計算練習をし、学習した内容を論理的に理解し、分析する力が身につけられたかを確認する。GDP や物価、失業率等の経済変数については計測方法や各種統計量の違いについて学び、計算練習を行う。さらに現実の経済データにもとづいて日本やアメリカ等の経済の動きについて検証する。こうした学びを通じて、数量的・統計的データを正確に理解できる力を養う。

上記の学習プロセスを経たうえで、ほぼ隔週で課されるホームワークを通じ、ステップ・バイ・ステップに理論を論理的に組み立ていく力や経済理論の理解度を測定する。最後に、経済学を用いて社会現象を複眼的視点から論理的に理解・分析する力を問う計算問題や記述問題で構成される中間、期末試験を行い、総合的に理解度を測定する。
以上の達成度の測定によって、成績が B－（2019 年度以前の入学生では B）以上の学生は、上記の力の基礎を修得できたと考える。

また、授業評価アンケートで示されるシラバスの到達目標の達成度などによって、授業・成績評価の内容が上記の力の修得に適切であるかを精査し、必要な場合には改善を図る。

【経済数学入門 A・B】

経済数学入門では、数量的・統計的データを正確に理解することができる力を養うために、経済学の学習に必要な数学的基礎知識を身につけることを目的とする。数学的な素養に関する学生間のバラつきが大きいことを踏まえ、クラスにおける学生の理解度の差を極力揃えるために、事前のプレイスメント・テストを通じてクラス分けを行っている。各クラスでは、高校数学の復習に加え、微分に関する諸法則や適化問題の解法を学習する。その達成度は、複数回の宿題、中間試験および定期試験により測定する。宿題では、主に計算問題が出題され、様々な形式の問題に取り組むことで学習した数学上の諸法則の理解度を測定する。また中間試験では、ミクロ経済学、マクロ経済学および統計学に関連した問題が出題され、

それらの分野に登場する概念と数学的手続きとの関係性を理解できているかどうかを測定する。そして定期試験では、学習した数学上の諸法則や問題解法の技術を用いて、様々な種類の最適化問題の解を正確に導き出す力が身に付いているかどうかを測定する。その結果、成績が B－（2019 年度以前の入学生では B）以上の学生は、上記の力の基礎を習得できたと見なす。

また、授業評価アンケートで示されるシラバスの到達目標の達成度などによって、授業・成績評価の内容が上記の力の修得に適切であるかを精査し、必要な場合には改善を図る。

【基礎統計学】

基礎統計学は、数量的・統計的データを正確に理解する力を養うことを主目的としている。特に基礎的な能力として、社会分析における数量データの役割の適切な理解と、統計分析の結果を理解し解釈できる力、統計ソフトを利用して自ら統計データを分析する力を身につけていく。これらの達成度は、統計分析を実践し数量データの適切な理解を確認する宿題、および統計分析の適切な理解を問う中間試験・定期試験により測定する。

以上の達成度の測定によって、成績が B－（2019 年度以前の入学生では B）以上の学生は、上記の力の基礎を修得できたと考える。

また、授業評価アンケートで示される理解度およびシラバスの到達目標の達成度などによって、授業・成績評価の内容が上記の力の修得に適切であるかを精査し、必要な場合には改善を図る。

【経済と歴史】

経済と歴史では、日本・世界の経済・社会に関する知識を持ち、活用することができる力を養うために、日本と世界の経済史に関する基本的な概念と知識を学び、その知識をさまざまな経済･社会問題を考えるうえで活用する力を授業内のディスカッションなどで養う。その達成度は、中間試験、定期試験における、基本的事実、概念の理解を測定する問題、および、授業内のディスカッションを踏まえた毎回の授業の後の記述式アンケートへの評価によって測定される。

さらに、同科目では、世界の多様性、および経済問題・社会問題の多面性を理解し、適切な議論を行うことができる力を養うために、ミクロ経済学の理論を踏まえたうえで、その理論とは異なる社会科学の諸学説も参照しながら、日本と世界の経済の歴史を学ぶ。そのなかで、参照する理論が異なれば同じ問題でも異なった側面からの考察が可能であることを理解し、さまざまな経済問題・社会問題を複数の複数の学説を持いて議論をする力を養成する。その達成度は、中間試験、定期試験において、複数の学説を比較して論じる論述試験によって測定される。

以上の達成度の測定によって、成績が B－（2019 年度以前の入学生では B）以上の学生は、上記の力の基礎を修得できたと考える。

また、授業評価アンケートで示されるシラバスの到達目標の達成度などによって、授業・成績評価の内容が上記の力の修得に適切であるかを精査し、必要な場合には改善を図る。

【International Program】

経済問題について、英語を用いて、他者の考えを正確に理解し、自らの考えを明確に伝えることができる力を International Program では以下の科目において養成する。まず第 1 セメスターでは、Academic Foundations for Economics Majors で、リスニング、リーディングなどの学術英語の基礎を学び、Introduction to Economic Reasoning で、経済学の基本概念を用いた批判的に思考し、自身の考えをプレゼンテーションやライティングによって表現する力を身につける。第 2 セメスターでは、Global Economy Lecture で入門レベルの経済学を学び、Global Economy Laboratory においては、Lecture で学んだ内容を正確に理解し、それ対する自身の意見を論理的に表現する技術を学ぶ。さらに、第 3、第 4 セメスターでは、Economics A　Lecture, Economics B Lecture で、それぞれミクロ経済学、マクロ経済学を学び、Economics A Laboratory, Economics B Laboratory で、Lecture で学んだ内容を正確に理解し、それ対する自身の意見を論理的に表現する技術を学ぶ。
その達成度は、各セメスターの毎に中間試験と TOEFL-ITP において測定され、語学力に応じて次のセメスターのクラス分けが決定される。
また、授業評価アンケートで示されるシラバスの到達目標の達成度などによって、授業・成績評価の内容が上記の力の修得に適切であるかを精査し、必要な場合には改善を図る。

ルーブリックを用いた演習 I, II, III, IV および卒業論文評価によって経済学を用いて問題を解決する力などの達成度を測定する。

【演習 I・II】

演習 I・II では、世界の多様性、および経済問題・社会問題の多面性を理解し、適切な議論を行うことができる力を養うために、各専門分野の基礎から中級レベルの内容を、テキストの学習や、ディスカッションを通して学び、さらにそれらの専門知識を用いて具体的な社会問題を分析する手法を学ぶ。その達成度を、課題の内容、プレゼンテーションのクオリティ、ディスカッションへの貢献について、以下の学部共通のルーブリックによって評価する。以上の達成度の測定によって、成績が B－（2019 年度以前の入学生では B）以上の学生は、上記の力の基礎を修得できたと考える。

また、授業評価アンケートで示されるシラバスの到達目標の達成度などによって、授業・成績評価の内容が上記の力の修得に適切であるかを精査し、必要な場合には改善を図る。

演習 I・II　ルーブリック

	非常によい	よい	あまりよくない	よくない	評価対象外

	5	4	3	2	1
課題	課題に真剣取り組み、毎回、非常に質の高い回答を準備している	課題に真剣取り組み、おおむね質の高い回答を準備している	課題に真摯に取り組んでいるが、回答の質はあまり高くないことが多い	課題に真摯に取り組んではいないことがある	課題に取り組んでいない
プレゼンテーション	入念に準備されており、内容・構成が明確で、かつプレゼンテーションの姿勢も優れている	入念に準備はされているが、内容の明確さ、構成、プレゼンの姿勢のうち一つで不十分な点がある	準備はされているが、内容の明確さ、構成、プレゼンの姿勢のうち 2 以上が不十分な点がある	準備が不十分で、内容の明確さ、構成、プレゼンの姿勢のいずれにも不十分な点がある	プレゼンの準備を行っていない
ディスカッション	根拠を明確に示した明確な発現（討議・質問）を積極的に行っている	発言は積極的に行うが、その内容が不明瞭であることもある	発言は積極的に行うが、その内容が不明瞭であることが多い	発現を積極的に行わない	まったく発言しない

S 評価　15 点、A 評価　13-14 点　B 評価　11-12 点　C 評価 9-10 点　D 評価 8-7 点　E 評価 6 点以下

【演習 III】

演習 III では、世界の多様性、および経済問題・社会問題の多面性を理解し、適切な議論を行うことができる力を、また、経済学の学修を通じて、自らの行動を律し、他者と協力しながら、目標を達成できる力を、さらに、社会の発展、人びとの幸福への方途を、経済学を用いて提案することができる力を養うために、グループによるリサーチを行い、学部内でのゼミ対抗研究発表大会や学外のコンペで成果を発表する。さらに、その成果をジュニア・ペーパーとして提出する。その達成度は、リサーチのクオリティ（課題発見・問題解決、客観的分析・明確な主張）、チームへの貢献について、以下の学部共通のルーブリックによって評価される。

以上の達成度の測定によって、成績が B－（2019 年度以前の入学生では B）以上の学生は、上記の力の基礎を修得できたと考える。

また、授業評価アンケートで示されるシラバスの到達目標の達成度などによって、授業・成績評価の内容が上記の力の修得に適切であるかを精査し、必要な場合には改善を図る。

演習 III　ルーブリック

	非常によい 5	よい 4	あまりよくない 3	よくない 2	評価対象外 1
課題発見・問題解決	先行研究を踏まえてオリジナリティがある問題を設定し、実現可能性のある解決策を提示している	先行研究の検証、問題のオリジナリティ、解決策の実現可能性のうち一つが不十分である	先行研究の検証、問題のオリジナリティ、解決策の実現可能性のうち 2 つが不十分である	先行研究の検証、問題のオリジナリティ、解決策の実現可能性のうちのいずれもが不十分である	先行研究のコピペの水準
客観的分析・明確な主張	課題について客観的な分析を行い、自らの主張を明確なサポートとともに提示している	課題についての客観的分析、明確なサポートを伴う主張が行われているが、やや改善の余地がある	課題についての客観的分析、明確なサポートを伴う主張のうちいずれかが不十分である	課題についての客観的分析、明確なサポートを伴う主張のうちいずれもが不十分である	分析が行われておらず、主張もない
チームへの貢	リサーチを成功に導くため、チームの	リサーチを成功に導くため、チームの課題	リサーチには参加しているが、チームの課	リサーチへの参加が積極的ではなく、決められ	リサーチのチームに事実上

献	課題を明確にし、その解決のために積極的に取り組んでいる	の解決のために取り組んでいる	題の解決のために積極的に行動することはない	たミーティングに来ないなどチームの足を引っ張るような行動が多い	参加していない

S 評価　15 点、A 評価　13-14 点　B 評価　11-12 点　C 評価 9-10 点　D 評価 8-7 点　E 評価 6 点以下

【演習 IV・卒業論文研究】

演習 IV・卒業論文研究では、社会の発展、人びとの幸福への方途を、経済学を用いて提案することができる力を養うために、教員の指導の下、個人で課題を設定して、経済学を用いてその解決策を提示する。その達成度は、以下の学部共通のルーブリックによって評価される。以上の達成度の測定によって、成績が B－（2019 年度以前の入学生では B）以上の学生は、上記の力の基礎を修得できたと考える。

また、授業評価アンケートで示されるシラバスの到達目標の達成度などによって、授業・成績評価の内容が上記の力の修得に適切であるかを精査し、必要な場合には改善を図る。

卒業論文評価基準

規準項目	達成度	評価指標
1.　研究の問い	5	研究の問いは明確に述べられ、経済学的意義が明確に示されている。さらに、研究の独創性が明確に示され、既存の研究のなかで位置づけられている。
	4	研究の問いは明確に述べられ、経済学的意義が明確に示されている。
	3	研究の問いは明確に述べられ、経済学的意義が部分的に示されている。
	2	研究の問いは述べられ、経済学的意義が部分的に示されている。
	1	研究の問いが明確に述べられていない。
2.　背景と正当化	5	充分な先行研究が参照され、明確に既存の研究の問題点を指摘でき、明らかに主題は正当化されている。
	4	充分な先行研究が参照され、既存の研究の問題点を指摘でき、主題は正当化されている。
	3	充分な先行研究が参照されているが、既存の研究の問題点の指摘および主題の正当化には、不明瞭な個所がある。
	2	先行研究を集めているが、列挙しているだけである。既存の研究の問題点の指摘は不完全か不明瞭である。
	1	先行研究が非常に少ない。または全く関係ない先行研究が参照されている。
3.　研究方法、分析	5	経済学の用語に基づいて、経済理論が正しく使用されている。また、検証すべき仮説と結果の解釈方法が明確に述べられている。
	4	経済学の用語を基づいて、経済理論が正しく使用されている。検証すべき仮説も述べられている。
	3	経済学の用語を使っているものの、経済理論が誤って使用されて

		いるか、問題の本質から逸れている。また、検証すべき仮説も曖昧である。
	2	経済理論とほとんど関係ないが、経済学の用語を使おうと努力している。ただ、検証すべき仮説が曖昧である。
	1	経済理論が全く使われていない。経済学の用語が使用されていない。検証すべき仮説が曖昧である。
4.　実証分析（質的データ） ※歴史的な記録や資料、理論経済学上の命題、また哲学的に正当化されている命題など	5	質的データを使い、様々な角度からの議論を尽くして、仮説を検証している。特に、異なる見解に関しても質的データを使って、慎重に考察している。
	4	質的データを使い、様々な角度からの議論を尽くして、仮説を検証している。ただ、異なる見解に関して、さらなる議論の余地がある。
	3	仮説を検証するために、質的データが用いられている。ただし、証拠の適用方法が単純であるか、検証のための議論が不十分である。
	2	適切な質的データを用いて、仮説の正当性を主張しようとしているが、根拠が薄弱である。
	1	質的データが使われていない。または誤って用いられている。
4.　実証分析（数量データ） ※政府統計や、アンケート調査の結果、数値シミュレーションのデータなど	5	数量データを使い、統計的・計量経済学的手法を用いて、様々な角度から仮説を検証している。特に、異なる見解に関しても数量データを使った分析を行い、結果の頑健性を検証している。
	4	数量データを使い、統計的・計量経済学的手法を用いて、様々な角度から仮説を検証している。ただ、異なる見解に関して、さらなる分析の余地がある。
	3	仮説を検証するために、仮説検定や信頼区間、シミュレーション分析などが用いられている。ただし、その検証方法が単純であるか、分析が不十分である。
	2	適切な数量データを使用し、記述統計量やグラフを使って、主張の正当性を説明しようと試みている。
	1	分析に不適切なデータが使用されているか、不適切な手法が使用されている。
5.　要旨と結論	5	論文の内容が適切にまとめられ、結論部分は、理論やデータと整合的である。政策的な解釈などで、さらに興味深い問題提起がなされている。
	4	論文の内容が適切にまとめられ、結論部分は、理論やデータと整

		合的である。政策的な解釈、または限界性、今後の研究の方向性などが、ある程度示されている。
	3	論文の内容が適切にまとめられ、結論部分は、理論やデータと整合的である。ただ、政策的な解釈、または限界性、今後の研究の方向性などが、ほとんど示されていない。
	2	論文の内容がまとめられ、結論部分は、理論やデータとおおむね整合的である。
	1	論文のまとめが曖昧であるか、結論が述べられていない。もしくは、結論部分は、これまでの議論との関連性が希薄である。
6. 言語と形式 ※章立て、段落、文法、綴り、文の構造、フォーマット、レイアウト、文字数、参考文献の書式	5	論文として構成が明瞭で一貫している。洗練された文章で、記述において間違いが存在せず、要求された形式で正しく書かれている。
	4	論文として構成が明瞭で一貫している。文章の記述において重要な間違いが存在せず、要求された形式で正しく書かれている。
	3	論文として構成がほぼ明瞭であるが、文章の記述において、いくつかの間違いがある。おおむね正しい形式で書かれているが、間違いもある。
	2	論文として構成がほぼ明瞭であるが、文章の記述において、重要ないくつかの間違いがある。形式にいくつかの逸脱がある。
	1	論文として構成が明瞭ではない。文章記述に関して、重大な間違いが多々あり、必要な形式を満たしていない。または、剽窃がある。

評価基準と達成度

S … 26 点以上

A … 21 点～25 点

B … 16 点～20 点

C … 12 点～15 点

D … 9 点～11 点

E … 6 点～8 点

（2） 長所・特色

大学における成績評価は、あくまで絶対評価であるべきである。その観点から、経済学部では、各科目の到達目標を定め、それに合わせて成績評価を行っている。一方、大学で定められた成績分布の基準は、相対評価を志向しているが、それは、あくまでも各科目の到達目標、および成績評価のための試験・レポートの難易度が適切であるかを判断するために用い

られている。ゆえに、同基準から乖離した成績分布がある場合には、試験レポートの難易度を適切に調整するように求められる。このように、経済学部では、到達目標に応じた絶対評価を基準に、相対評価の指標を用いながら適切な成績評価を行っている。

また、経済学部では、各科目で身に付けることができる能力（LOCs）が、修得できたかを、各科目の成績評価によって判断する（成績が B－以上であれば、同能力が修得できたと考えられる）ことにも特徴がある。そのために、必修科目・主要科目では、各能力がどのような授業内容によって修得できるかを明示している。

（3） 問題点

現在、LOCs の各能力がどのような授業内容によって修得できるかを明示しているのは、必修科目・主要科目に限られている。これを全科目に広げる必要がある。また、演習のルールリックについては、改善の余地があるとの意見がある。演習の内容については、各演習によって差があるため、より包括的なルーブリックの作成を、学部として進める必要がある。

（4） 全体のまとめ

経済学部では、各科目の到達目標をシラバスで明記し、その達成に合わせて成績評価を行っている。さらに、大学で定められた成績分布の基準をと照らし合わせながら、試験レポートの難易度を適切に調整している。

また、各科目で身に付けることができる能力・ラーニング・アウトカムズ（以下 LOCs）を定め、かつそれを履修要項に示し、さらに、主要科目では、各能力がどのような授業内容によって修得できるかを明示している。今後は、このような取り組みを全科目に広げる必要がある。

点検評価項目⑥：学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

評価の視点１：学習成果を測定するアセスメント項目が適切に設定され、学位授与方針に示した学生の学習成果を、すべての学生が適切に修めることができるように、科目が配置されているか。
評価の視点２：学習成果を測定するアセスメント項目を、直接的指標、間接的指標によって測定する方法が、明確にされているか。
評価の視点３：学部の教育課程において、学位授与方針に明示した学生の学習成果を修めたかを適切に把握・評価し、その評価結果を学部教育の改善に生かしているか。

経済学学部では、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に示した能力（LOCs）を、アセスメント項目として設定した。その上で、各能力が、学部必修科目・主要科目によって達成可能であることを、下表によって確認できる。経済学部では、学習するすべての学生が、学位授与方針示した能力（LOCs）修めることができるように、科目が配置されている。

アセスメント項目 ディプロマ・ポリシー（Learning Outcomes）	ミクロ経済学	マクロ経済学	経済数学入門	経済と歴史	基礎統計学	IP 科目群	演習 I・II	演習 III	演習 IV、卒業論文
(1) 経済学を用いて、社会現象を複眼的視点から論理的に理解・分析することができる。	○	○							
(2) 数量的・統計的データを正確に理解することができる。			○		○				
(3) 日本・世界の経済・社会に関する知識を持ち、活用することができる。				○					
(4) 経済問題について、日本語や英語を用いて、他者の考えを正確に理解し、自らの考えを明確に伝えることができる。						○			
(5) 世界の多様性、および経済問題・社会問題の多面性を理解し、適切な議論を行うことができる。				○			○	○	

(6)経済学の学修を通じて、自らの行動を律し、他者と協力しながら、目標を達成できる。							○	○	
(7)社会の発展、人びとの幸福への方途を、経済学を用いて提案することができる。							○	○	○

学習成果を測定するアセスメント項目を、直接的指標、間接的指標によって測定する方法は、以下の様に、示されている。

アセスメント項目	アセスメント指標
(1)　経済学を用いて、社会現象を複眼的視点から論理的に理解・分析することができる。	【直接指標】 － 必修科目「ミクロ経済学」「マクロ経済学」での達成度測定 **1. 各科目において、アセスメント・プランに示した内容が適切に教えられたかを検討する** **2. 各科目の成績（B 以上）から、アセスメント項目の達成度を測定** **3. 達成度を改善するために、必要な改善点を検討する** 【間接指標】 1. セメスター終了時に、各必修科目において、アセスメント項目が達成できたかを、アンケート調査によって測定する 2. 卒業式の学位記授与式の会場で、全卒業生に対するアンケート調査によって測定する
(2)数量的・統計的データを正確に理解することができる。	【直接指標】 － 必修科目「経済数学入門」「基礎統計学」での達成度測定 **1. 各科目において、アセスメント・プランに示した内容が適切に教えられたかを検討する** **2. 各科目の成績（B 以上）から、アセスメント項目の達成度を測定** **3. 達成度を改善するために、必要な改善点を検討する** 【間接指標】 1. セメスター終了時に、各必修科目において、アセスメント項目が達成できたかを、アンケート調査によって測定する

	2. 卒業式の学位記授与式の会場で、全卒業生に対するアンケート調査によって測定する
(3) 日本・世界の経済・社会に関する知識を持ち、活用することができる。	【直接指標】 – 必修科目「経済と歴史」での達成度測定 **1. 各科目において、アセスメント・プランに示した内容が適切に教えられたかを検討する** **2. 各科目の成績（B 以上）から、アセスメント項目の達成度を測定** **3. 達成度を改善するために、必要な改善点を検討する** 【間接指標】 1. セメスター終了時に、各必修科目において、アセスメント項目が達成できたかを、アンケート調査によって測定する 2. 卒業式の学位記授与式の会場で、全卒業生に対するアンケート調査によって測定する
(4) 経済問題について、日本語や英語を用いて、他者の考えを正確に理解し、自らの考えを明確に伝えることができる。	【直接指標】 – 必修の英語科目を含むインターナショナル・プログラムでの達成度測定 – TOEFL, TOEIC のスコアを用いて英語コミュニケーション力の達成度測定 **1. TOEFL IPT のスコアの上昇度を検討する** **2. IP Level 2 に進む学生数を調査・増加策を策定する** 【間接指標】 1. セメスター終了時に、各必修科目において、アセスメント項目が達成できたかを、アンケート調査によって測定する 2. 卒業式の学位記授与式の会場で、全卒業生に対するアンケート調査によって測定する
(5) 世界の多様性、および経済問題・社会問題の多面性を理解し、適切な議論を行うことができる。	【直接指標】 – 必修科目「経済と歴史」「演習 I・II」「演習 III」での達成度測定 **1. 各科目において、アセスメント・プランに示した内容が適切に教えられたかを検討する** **2. 各科目の成績（B 以上）から、アセスメント項目の達成度を測定** **3. 達成度を改善するために、必要な改善点を検討する**

	【間接指標】 1. セメスター終了時に、各必修科目において、アセスメント項目が達成できたかを、アンケート調査によって測定する 2. 卒業式の学位記授与式の会場で、全卒業生に対するアンケート調査によって測定する
(6)経済学の学修を通じて、自らの行動を律し、他者と協力しながら、目標を達成できる。	【直接指標】 － 必修科目「演習 III」での達成度測定 **1. 各科目において、アセスメント・プランに示した内容が適切に教えられたかを検討する** **2. 各科目の成績（B 以上）から、アセスメント項目の達成度を測定** **3. 達成度を改善するために、必要な改善点を検討する** －1 年次と 4 年次に受験する就業力測定試験によって測定 **就業力テストを、1 年次終了時の 1 月、および 4 年次の 9 月に行い、4 年間で就業力がどれだけ向上しかを検討する** 【間接指標】 1. セメスター終了時に、各必修科目において、アセスメント項目が達成できたかを、アンケート調査によって測定する 2. 卒業式の学位記授与式の会場で、全卒業生に対するアンケート調査によって測定する
(7)社会の発展、人びとの幸福への方途を、経済学を用いて提案することができる。	【直接指標】 － 必修科目「演習 III」、および「演習 IV」「卒業論文」での達成度測定 **1. 各科目において、アセスメント・プランに示した内容が適切に教えられたかを検討する** **2. 各科目の成績（B 以上）から、アセスメント項目の達成度を測定** **3. 達成度を改善するために、必要な改善点を検討する** 【間接指標】 1. セメスター終了時に、各必修科目において、アセスメント項目が達成できたかを、アンケート調査によって測定する 2. 卒業式の学位記授与式の会場で、全卒業生に対するアンケート調査によって測定する

学部の教育課程において、学位授与方針に明示した学生の学習成果を修めたかを適切に把握・評価するために、必修科目・主要科目において、以下の様に、（A）直接指標、（B）間接指標の両者を用いて、学生の学習成果を適切に把握及び評価しているかを測定し、その評価結果を学部教育の改善に生かしている。

（A）直接指標

アセスメント・ポリシーに応じて、アセスメント項目に上げた LOCs が達成されていたかを、以下の綱目を示し、アセスメントを行う。

1. アセスメント項目
2. アセスメント項目の力を学生が身につけるため、授業で行ったこと
3. 成績評価の基準
4. 上記のアセスメント項目の力を身につけていたかを測定するために、成績評価は適切であったか
5. 成績評価の分布
6. 成績評価の分布は望ましい結果であったといえるか

（B）間接指標

アセスメント項目に上げたラーニング・アウトカムズが達成されていたかを、セメスター終了時のアンケートによって測定している。

【根拠資料】2019 年度春学期のアセスメント結果

また、卒業生へのアンケートによって、ディプロマ・ポリシーに示した能力（LOCs）がどれだけ身に付いたかを測定している。

【根拠資料】2019 年卒業生アンケート結果

（2） 長所・特色

経済学部では、ディプロマ・ポリシーに示した能力（LOCs）を、アセスメント項目として設定し、各能力が、学部必修科目・主要科目によって達成可能であるように科目を配置した。これによって、すべての経済学部生が学部教育によって LOCs を達成できる。

また、学習成果を測定するアセスメント項目を測定する方法を、直接的指標、間接的指標それぞれについて示した。さらに、必修科目・主要科目において、学生の学習成果を適切に把握及び評価しているかを測定し、その評価結果を学部教育の改善に生かしている。

（3） 問題点

現在、直接的指標、間接的指標を用いてアセスメントの報告書を作成しているのは、必修科目・主要科目に限られている。これを全科目に広げる必要がある。また、演習のルールリックについては、改善の余地があるとの意見がある。

また、アセスメントの結果を受けて、授業改善を行っていく仕組みをさらに検討して作り上げていく必要がある。

（4） 全体のまとめ

経済学学部では、LOCs をアセスメント項目として設定し、各能力が、学部必修科目・主要科目によって達成可能であるように科目を配置した。また、学習成果を測定するアセスメント項目を測定する方法を、直接的指標、間接的指標それぞれについて示した。さらに、必修科目・主要科目において、学生の学習成果を適切に把握及び評価しているかを測定し、その評価結果を学部教育の改善に生かしている。今後は、直接的指標、間接的指標を用いてアセスメントの報告書を全科目に広げる必要がある。さらに、アセスメントの結果を受けて、授業改善を行っていく仕組みをさらに検討して作り上げていきたい。

【根拠資料】

1. 2019 年度　春学期実施科目のアセスメント結果

(1) ミクロ経済学

【直接指標】

1. アセスメント項目
   経済学を用いて、社会現象を複眼的視点から論理的に理解・分析することができる。

2. アセスメント項目の力を学生が身につけるため、授業で行ったこと
   ミクロ経済学では、社会現象を複眼的視点から論理的に理解･分析することができる力を養うために、日常の経済問題を理解するために必要なミクロ経済学の基礎理論を学び、またその理論を用いて政策提案を理解し評価する能力を養う。具体的には、需要・供給曲線を用いた市場分析や、基礎的な消費者理論・生産者理論の学習を通して日常の経済問題を理解する力を養成する。また、価格規制や課税といった政策が市場の成果にどのような影響を及ぼすか、政策の実施が経済厚生にどのような変化をもたらすかを学習するなかで、政策を理解・評価する力を養う。その達成度は、中間試験、定期試験において、世の中の出来事が均衡に及ぼす影響を問う問題や、市場価格が消費者や生産者の意思決定に及ぼす影響について考える問題、そして政府の政策が市場の成果にどのような影響を及ぼすか、厚生面でどのような影響がでるか等を問う問題を通して測定する。その結果、成績が B－（2019 年度以前の入学生では B）以上の学生は、上記の力の基礎を修得できたと考える。

3. 成績評価の基準
   中間試験 35%、定期試験 45%、宿題 15%

4. 上記のアセスメント項目の力を身につけていたかを測定するために、成績評価は適切であったか
   中間試験や定期試験では、世の中の出来事が均衡に及ぼす影響を問う問題や、市場価格が消費者や生産者の意思決定に及ぼす影響について考える問題、そして政府の政策が市場の成果にどのような影響を及ぼすか、厚生面でどのような影響がでるか等を問う問題を出題し、その点数に応じて成績評価を行った。こうした成績評価で B－以上の成績を修得した学生は、社会現象を複眼的視点から論理的に理解・分析する基礎的な力を身につけたと考えられる。

5. 成績評価の分布
B－以上 81.3%、C,C＋15.2%、D,D＋3.5%、E,N 0%

6. 成績評価の分布は望ましい結果であったといえるか
81.3%の学生が B－以上の成績を修めており、多くの学生が、社会現象を複眼的視点から論理的に理解・分析する基礎的な力を身につけることができた。しかし、残念ながら 18.7%の学生は C＋以下の成績しか修められなかった。今後、宿題や中間試験の点数がふるわなかった学生を教員や SA(Student Assistant)のオフィス・アワーに行くよう促したり、授業内での問題演習の時間を増やし教員が教室を巡回して学生が質問をしやすい環境を作ったりといった対策を行うことで、B－以上の成績を修める学生の割合を高めて行きたい。

【間接指標】
セメスター終了時に、以下のアンケートを行った。

質問 : あなたは、この授業が、以下のそれぞれの力を養うために役に立ったと思いますか。自分の意見に最も近いものを、それぞれ 1 つずつ選んでください。

1.「経済学を用いて、社会現象を複眼的視点から論理的に理解・分析することができる」

非常に役に立った	多少は役に立った	あまり役にたたなかった	まったく役にたたなかった	総回答数	履修人数
52%	42%	6%	0%	121	198

（2）経済数学入門 A・B

【直接指標】

2. アセスメント項目
・数量的・統計的データを正確に理解することができる

3. アセスメント項目の力を学生が身につけるため、授業で行ったこと
【経済数学入門 B】
社会に対する自らの関心事を明らかにした上で、数学的モデルを用いてその問題をどう扱うことができそうかをグループ内で議論する時間を設けた。

【経済数学入門 A(中位クラス)】
4～5 人のグループを作り、アクティブラーニングの手法の 1 つであるジグソー法を用いて、予習範囲をグループの仲間同士で教えあうという取り組みを行った。
【経済数学入門 A(下位クラス)】
要所要所において学生間で理解の確認をさせ、質問を受け、説明を補充した。

4. 成績評価の基準
【経済数学入門 B】
中間試験（40%）、定期試験（40%）、5 回の宿題提出（20%）、授業内で練習問題への回答・貢献により Bonus ポイント（最大で 1%）

【経済数学入門 A(中位クラス)】
中間試験（30%）、定期試験（30%）、10 回の宿題提出および全 30 回の授業内フィードバックの提出（20%）、授業内での小テストの実施（20%）、授業内での発言・貢献により Bonus ポイント（最大で 1%）

【経済数学入門 A(下位クラス)】
中間試験（40%）、定期試験（50%）、12 回の宿題提出(10%)
このクラスは入門中の入門クラスなので、A+(S)なしの ABC 評価とする。

5. 上記のアセスメント項目の力を身につけていたかを測定するために、成績評価は適切であったか
「説明する力」と「経済学で必要な数学を使いこなす力」が身についたのかどうかを確かめるために、本年度の中間試験スコアをもとに出席回数と、１７問テストという経済学部独自の数学能力を診断するテストによって回帰分析を行った結果、身についているということが統計的に検証できた。詳細は添付資料・碓井(2018)を参照されたい。

参考資料
碓井健寛(2018)「経済学で必要な数学を使いこなす力と説明する力はついたのか？－経済数学入門 A(碓井)における中間試験および最終成績の要因分析」

6. 成績評価の分布
B 以上 55.2%、C 24%、D 13.5%、E, N 7.3%

【経済数学入門 B】
B- 以上 : 67.8%、C+ および C : 14.6%、D および D+ : 11.3%、E+以下および N : 6.4%

【経済数学入門 A(中位クラス)】

B- 以上：72%、C+ および C：13%、D および D+：4%、E+以下および N：11%

【経済数学入門 A(下位クラス)】

B- 以上：26%、C+ および C：18%、D および D+：19%、E+以下および N：6%

7. 成績評価の分布は望ましい結果であったといえるか

およそ 55%の学生が B-以上の成績を修めており、これらの学生は「経済学で必要な数学を使いこなす力」と、汎用的なコミュニケーションスキルである「説明する力」を身につけることができたと言って良い。しかしながら、45%の学生は C+以下成績しか修められなかった。特におよそ 21%の学生が D, E, N の評価となっている。

【経済数学入門 B】

およそ 67%の学生が B-以上の成績を修めており、これらの学生は「数量的・統計的データを正確に理解することができる」力をある程度身に付けられたと判断できる。C+以下の成績を修めた学生が 30%程度存在するが、A-以上の成績を修めた学生が約 25%であり、B-、B、B+を修めた学生の割合の合計が約 42%であることから全体の成績分布は望ましい形状であると言える。

経済数学入門 A(中位クラス)も、B とほぼ同様である。

経済数学入門 A(下位クラス)は、全く数学を苦手とするクラスであるので、B-以上は多くないが、E+以下も多くはないので、数学能力の全体の底上げはできたのではないかと思われる。

今後の対策として 2 点あげる。第 1 に受講者への適切な情報提供である。受講者に対して、大学の実施しているプレイスメント・テストと、経済数学入門 A および B の受講者に対して実施する 17 問テストをもとに、適切なクラス選択ができるよう教員から情報提供を行うつもりである。第 2 に成績の振るわなかった学生向けの措置として、第 2 セメスターに開講されているミクロ経済学の再履修クラス(齋藤)において、数学や経済学の復習問題を解いてもらうことにより、次年度以降の経済学や統計学関連の科目への橋渡しとしたい。

【間接指標】

セメスター終了時に、以下のアンケートを行った。

質問：あなたは、この授業が、以下のそれぞれの力を養うために役に立ったと思いますか。自分の意見に最も近いものを、それぞれ 1 つずつ選んでください。

「数量的・統計的データを正確に理解することができる」

経済数学入門 B（上位クラス）

非常に役に立った	多少は役に立った	あまり役にたたなかった	まったく役にたたなかった	総回答数	履修人数
58%	35%	5%	2%	55	70

経済数学入門 A（中位クラス）

非常に役に立った	多少は役に立った	あまり役にたたなかった	まったく役にたたなかった	総回答数	履修人数
32%	49%	13%	6%	53	93

経済数学入門 A（下位クラス）

非常に役に立った	多少は役に立った	あまり役にたたなかった	まったく役にたたなかった	総回答数	履修人数
17%	58%	21%	8%	24	66

(3) 基礎統計学

【直接指標】

1. アセスメント項目

・数量的・統計的データを正確に理解することができる。

2. アセスメント項目の力を学生が身につけるため、授業で行ったこと

基礎統計学は、統計データを正確に理解する力を養うことを主目的としている。特に基礎的な能力として、社会分析における数量データの役割の適切な理解と、統計分析の結果を理解し解釈できる力、Excel を利用して自ら統計データを分析する力を身につけていく。これらの達成度は、統計分析を実践し数量データの適切な理解を確認する宿題、レポート、および統計分析の適切な理解を問う中間試験・定期試験により測定する。
以上の達成度の測定によって、成績が B－（2019 年度以前の入学生では B）以上の学生は、上記の力の基礎を修得できたと考える。

また、授業評価アンケートで示される理解度およびシラバスの到達目標の達成度などによって、授業・成績評価の内容が上記の力の修得に適切であるかを精査し、必要な場合には改善を図る。

3. 成績評価の基準

中間試験 30%、定期試験 35%、レポート　10%, 演習 10%, Pop Quiz 5%、宿題 10%

4. 上記のアセスメント項目の力を身につけていたかを測定するために、成績評価は適切であったか

演習では、与えられたデータに基づき Excel を用いて統計分析を行うことで、授業で学んだ統計分析の理解の定着を確認した。宿題では、授業および演習を通して学んだデータの適切な理解力を確認するために、演習問題の類題を出題し、その点数に応じて成績評価を行った。Pop Quiz は、データの基礎的理解の定着の確認および復習等の授業外学習の実施を促進するため、不定期に実施し、その点数に応じて成績評価を行った。中間試験および定期試験では、データおよび統計分析の適切な理解を問う問題を出題した。各自興味のある社会問題についてのレポートの作成では、統計分析の実践を通した理解の定着を評価した。これらの成績評価で、B－以上の成績を修得した学生は、統計データを正確に理解する基礎的な力を身につけたと考えられる。

5. 成績評価の分布（2019 年度履修者は全員 2 年生以上のため旧方式による成績評価）

S 4.3%、A 23.5%、B 28.9%、C 25.1%、D 8.6%、E,N 9.6%

6. 成績評価の分布は望ましい結果であったといえるか

56.7%の学生が B 以上の成績を修めており、多くの学生が、数量的・統計的データを正確に理解する基礎的な力を身につけることができた。しかし、残念ながら、43.3%の学生は C 以下の成績しか修められなかった。今後は、Excel 操作が苦手な学生へのコンピュータ・リテラシーの履修推奨や、教員、SA によるオフィスアワーの積極的な活用を促すなどの対策を行い、B 以上の成績を修める学生の割合を高めて行きたい。

【間接指標】

セメスター終了時に、以下のアンケートを行った。

質問：あなたは、この授業が、以下の力を養うために役に立ったと思いますか。自分の意見に最も近いものを、それぞれ 1 つずつ選んでください。

1.「数量的・統計的データを正確に理解することができる」

非常に役に立った	多少は役に立った	あまり役にたたなかった	まったく役にたたなかった	総回答数	履修人数
36%	60%	3%	2%	135	187

(4) マクロ経済学

1. アセスメント項目

経済学を用いて、社会現象を複眼的視点から論理的に理解・分析することができる。

2. アセスメント項目の力を学生が身につけるため、授業で行ったこと

マクロ経済学では、経済学を用いて、社会現象を複眼的視点から論理的に理解・分析することができる力を養うために、長期、短期の 2 つの視点から、いいかえれば古典派、ケインズ派という対立するアプローチから、マクロ経済学を整理し、各種の政策手段によってもたらされる経済効果の違いを学習した。グラフや数式等を用いた経済理論の学習を通し、論理的に理解し、分析する力を身につけるとともに、現実の統計データに触れることを通じて、数量的・統計的データを正確に理解することができる力を養った。

具体的には、まず基本的な専門用語を正確に理解させることからスタートした。各回の授業において用いられるキーワードについて事前に調べてくる予習課題を課し、また各章が終わるタイミングでキーワードについて小テストを行うことで、専門用語に対する正確な理解度を測定した。

次にマクロ経済理論を論理的に展開し、理解・分析することができる力を身につけられるように、講義内ではグラフや数式等を用いて学習した。そのうえで数値例にもとづいて計算練習をし、学習した内容を論理的に理解し、分析する力が身につけられたかを確認した。

GDP や物価、失業率等の経済変数については計測方法や各種統計量の違いについて学び、計算練習を行った。さらに現実の経済データにもとづいて日本やアメリカ等の経済の動きについて検証した。こうした学びを通じて、数量的・統計的データを正確に理解できる力を養った。

上記の学習プロセスを経たうえで、ほぼ隔週で課される宿題を通じ、ステップ・バイ・ステップに理論を論理的に組み立ていく力や経済理論の理解度を測定した。

最後に、経済学を用いて社会現象を複眼的視点から論理的に理解・分析する力を問う計算問題や記述問題で構成される中間、定期試験を行い、総合的に理解度を測定した。

以上の達成度の測定によって、成績が B 以上の学生は、上記の力の基礎を修得できたと考える。

また、授業評価アンケートで示されるシラバスの到達目標の達成度などによって、授業・成績評価の内容が上記の力の修得に適切であるかを精査し、必要な改善案を考慮した。

3. 成績評価の基準

中間試験 35%、定期試験 40%、宿題 10%、予習課題 10%、小テスト 5%

4. 上記のアセスメント項目の力を身につけていたかを測定するために、成績評価は適切であったか

全 6 回の宿題では、理論を論理的に組み立てていく力や経済理論の理解度を測定した。予習課題では各授業で取り扱うキーワードを事前に調べて提出することを課し、各章が終わるタイミングで小テストを実施し、その章で学んだキーワードに対する正確な理解度を測定した。また中間、定期試験では、長期、短期の 2 つの視点からマクロ経済学を整理し、各種の政策手段によってもたらされる経済効果の違いを論理的に理解しているかどうか、またグラフや数式等を用いて経済理論を論理的に理解し分析する力を身につけているかどうかを測るような計算問題や記述問題を出題した。

これら宿題・予習課題・小テスト・中間試験・定期試験の 5 項目での点数を総合し成績評価を行うことで、B 以上の成績を獲得した学生は、社会現象を複眼的視点から論理的に理解・分析する力を身につけたと考えられる。

5. 成績評価の分布

B- 以上：69%、C+ および C：14%、D および D+：8%、E+以下および N：9%

6. 成績評価の分布は望ましい結果であったといえるか

69%の学生が B－以上の成績を修めており、過半数の学生が、経済学を用いて、社会現象を複眼的視点から論理的に理解・分析する基礎的な力を身につけることができた。しかし、残念ながら、31%の学生は C+以下の成績しか修められなかった。

今後、各教員が授業内・授業外の創意工夫を行うとともに、ミクロ経済学や経済数学入門などの基礎的な授業を担当している教員とも情報を共有しながら、低位に甘んじている中間層への抜本的な対策を講じていく。

【間接指標】

セメスター終了時に、以下のアンケートを行った。

質問：あなたは、この授業が、以下のそれぞれの力を養うために役に立ったと思いますか。自分の意見に最も近いものを、それぞれ 1 つずつ選んでください。

1.「経済学を用いて、社会現象を複眼的視点から論理的に理解・分析することができる」

非常に役に立った	多少は役に立った	あまり役にたたなかった	まったく役にたたなかった	総回答数	履修人数
%	%	%	%		

（5）経済と歴史

1. アセスメント項目

- 日本・世界の経済・社会に関する知識を持ち、活用することができる。
- 世界の多様性、および経済問題・社会問題の多面性を理解し、適切な議論を行うことができる。

2. アセスメント項目の力を学生が身につけるため、授業で行ったこと

経済と歴史では、日本・世界の経済・社会に関する知識を持ち、活用することができる力を養うために、日本と世界の経済史に関する基本的な概念と知識を学び、その知識をさまざまな経済･社会問題を考えるうえで活用する力を授業内のディスカッションなどで養った。その達成度は、中間試験、定期試験における、基本的事実、概念の理解を測定する問題、および、授業内のディスカッションを踏まえた毎回の授業の後の記述式アンケートへの評価によって測定した。

さらに、同科目では、世界の多様性、および経済問題・社会問題の多面性を理解し、適切な議論を行うことができる力を養うために、ミクロ経済学の理論を踏まえたうえで、その理論とは異なる社会科学の諸学説も参照しながら、日本と世界の経済の歴史を学ぶ。そのなかで、参照する理論が異なれば同じ問題でも異なった側面からの考察が可能であることを理解し、さまざまな経済問題・社会問題を複数の複数の学説を持いて議論をする力を養成した。その達成度は、中間試験、定期試験において、複数の学説を比較して論じる論述試験によって測定された。

3. 成績評価の基準

中間試験 40%、定期試験 50%、宿題（Web 上での小テスト）10%

4. 上記のアセスメント項目の力を身につけていたかを測定するために、成績評価は適切であったか

中間試験、定期試験は、ともに問 1、問 2 から校正されている。問 1 では、3 ないし 4 つの文章から正しい文章を選択させる問題を 40 題出題した。これは、日本と世界の経済史

に関する基本的な概念を単に覚えるだけでなく、正しい文脈で使用できるかを測るためである。問 2 では、経済史学説を、他の学説と比較して論じることを求める論述問題を出題した。これは、、世界の多様性、および経済問題・社会問題の多面性を理解し、適切な議論を行うことができる力を測定するためである。
また、毎回の授業の後に Web 上で回答する小テストは、選択式で、授業の講義内容を確認するために行った。
これら中間試験、定期試験、小テストの 3 項目での点数を総合し成績評価を行うことで、B 以上の成績を獲得した学生は、日本・世界の経済・社会に関する知識を持ち、活用することができる力、および、世界の多様性、および経済問題・社会問題の多面性を理解し、適切な議論を行うことができる力を身につけたと考えられる。

5. 成績評価の分布
B－以上 66.0%、C,C＋17.52%、D,D＋11.0%、E,N 5.5%

6. 成績評価の分布は望ましい結果であったといえるか
66.0%の学生が B 以上の成績を修めており、約 3 分の 2 のが、日本・世界の経済・社会に関する知識を持ち、活用することができる力、および、世界の多様性、および経済問題・社会問題の多面性を理解し、適切な議論を行うことができる力を身につけたと考えられる。
しかし、残念ながら、3 分の 1 の学生は C+以下の成績しか修められなかった。今後、これ等の学生がより効果的に学習を進められるように、日常的な宿題の回数を増やすなどの授業改善を行いたい。

【間接指標】

セメスター終了時に、以下のアンケートを行った。

質問 : あなたは、この授業が、以下のそれぞれの力を養うために役に立ったと思いますか。自分の意見に最も近いものを、それぞれ 1 つずつ選んでください。

1. 日本・世界の経済・社会に関する知識を持ち、活用することができる。

非常に役に立った	多少は役に立った	あまり役にたたなかった	まったく役にたたなかった	総回答数	履修人数
46%	44%	8%	2%	173	232

2. 世界の多様性、および経済問題・社会問題の多面性を理解し、適切な議論を行うことが

できる。

非常に役に立った	多少は役に立った	あまり役にたたなかった	まったく役にたたなかった	総回答数	履修人数
44%	45%	10%	2%	173	232

（3）IP 科目

Diploma Policy Learning Outcomes for International Program Courses

Level 1 of the International Program's curriculum includes two courses to improve students academic English ability. The Academic Foundations for Economics Major course objectives are to improve students' vocabulary, grammar, reading, and listening skills in order to achieve a target TOEFL ITP score of 520+ by the end of the Fall semester. The Global Economy Laboratory course is an EAP course designed to improve students outlining, speaking, and academic writing skills. The courses combine to provide the academic English skills necessary to excel in upper level English-medium courses offered in the Faculty of Economics and study abroad. The specific course objectives for both courses are provided below.

Global Economy Laboratory (Academic Writing). Students will be able to:

- Use of effective academic study skills
- Use of effective reading strategies for high comprehension of readings in English
- Read English passages quickly at the rate of 240 words per minute or faster with a comprehension rate of 80% or better
- Outline textbook passages
- Enhance students' essay writing skills (exemplification and comparison; iBT Independent Writing Score 5)
- Enhance students' timed essay writing skills (iBT Independent Writing = Score 4+)
- Enhance students' summarizing and paraphrasing skills
- Develop students' ability to use sourced information for essay support (direct quotations, statistical data, expert opinions & analysis, other evidence)
- Enhance students' basic speaking fluency
- Enhance students' basic discussion skills
- Develop students' basic academic presentation skills

Academic Foundations for Economics Majors. Students will be able to:

- Comprehend and use the 1,000+ most frequently used academic English vocabulary
- Comprehend and use 300 common idiomatic expressions;

- Read 400-word passages quickly with high comprehension (257+ wpm with 80%+ comprehension)
- Read 1,600+ pages of graded readers
- Comprehend and use basic English sentence structures with 80% accuracy;
- Use effective test-taking skills and strategies to achieve a 520+ score on the ITP TOEFL
- Use effective test-taking skills and strategies for the speaking section of the iBT TOEFL
- Use intensive reading skills, strategies and techniques
- Use listening comprehension skills

Assessment

Assessment for the first-year International Program courses includes the average gain in the students' ITP scores and the number of students who elect to continue on the IP. Table 1 provides an overview of the average TOEFL score gains in the Spring and Fall semesters, as well as the gain measured over the academic year. Table 2 and 3 show the enrollment in the IP and the number of students continuing on the program. Students must have a minimum TOEFL ITP score of 450 and a GPA of 3.0+ to continue taking IP courses in the Fall semester.

Table 1. TOEFL ITP Score Increase for IP students

Panel A 2018

	Spring gain	Fall gain	Year gain
Count	155	85	85
Average	44	24	76
Minimum	0	0	30
Maximum	170	90	147
SD	29.71	18.31	28.16

Panel B 2019

	Spring gain	Fall gain	Year gain
Count	150	77	84
Average	47	13	67
Minimum	0	-50	0
Maximum	123	67	134
SD	28	21	27

Note: Fall 2019 Seven students did not take both the Nov 16 Mock ITP and the Dec 21st TOEFL-ITP

Table 2. IP Enrollment Spring Semester

Panel A　　Spring 2018

Spring 2018	PreIP	Intermediate	Advanced	Total
	93	40	22	155

Panel B　　Spring 2019

Spring 2019	PreIP	Intermediate	Advanced	Total
	90	36	23	149

Table 3. IP Enrollment Fall Semester

Panel A　　Fall 2018

Fall Placement	Spring 2018 Placement			Total
	PreIP	Intermediate	Advanced	
Intermediate	42	15	2	59
Advanced	4	6	16	26
Total Registered	46	21	18	85

Panel B　　Fall 2019

Fall Placement	Spring 2019 Placement			Total
	PreIP	Intermediate	Advanced	
Intermediate	38	19	3	60
Advanced	2	6	16	24
Total Registered	40	25	19	84

2.　卒業生アンケート結果

2019 年 3 月 18 日実施（総回答者数　211 名）

以下のそれぞれの項目について、大学生活でどの程度力をつけることができましたか？

1. 経済学を用いて、社会現象を複眼的視点から論理的に理解･分析することができる

1. 大いにつけることができた	42	19.6%
2. 多少力をつけることができた	145	67.8%
3. あまり力をつけられなかった	21	9.8%
4. まったく力をつけられてなかった	3	1.4%

2. 数量的・統計的データを正確に理解することができる

1. 大いにつけることができた	37	17.3%
2. 多少力をつけることができた	116	54.2%
3. あまり力をつけられなかった	51	23.8%
4. まったく力をつけられてなかった	7	3.3%

3. 日本・世界の経済・社会的な知識を、入手し活用することができる

1. 大いにつけることができた	61	28.5%
2. 多少力をつけることができた	126	58.9%
3. あまり力をつけられなかった	21	9.8%
4. まったく力をつけられてなかった	3	1.4%

4. 日本語および英語を用いて、他者の考えを正確に理解し、自らの考えを明確に伝えることができる

1. 大いにつけることができた	49	22.9%
2. 多少力をつけることができた	124	57.9%
3. あまり力をつけられなかった	35	16.4%
4. まったく力をつけられてなかった	3	1.4%

5. 世界の多様性、社会問題の多面性を理解し、適切な議論を行うことができる

1. 大いにつけることができた	67	31.3%
2. 多少力をつけることができた	125	58.4%

3. あまり力をつけられなかった	17	7.9%
4. まったく力をつけられてなかった	2	0.9%

6. 自らの行動を律し、他者と協力しながら、目的を計画的に実現できる

1. 大いにつけることができた	75	35.0%
2. 多少力をつけることができた	118	55.1%
3. あまり力をつけられなかった	17	7.9%
4. まったく力をつけられてなかった	2	0.9%

7. 社会の発展、人びとの幸福への方途を、経済学を用いて提案することができる

1. 大いにつけることができた	57	26.6%
2. 多少力をつけることができた	113	52.8%
3. あまり力をつけられなかった	34	15.9%
4. まったく力をつけられてなかった	5	2.3%

点検・評価項目⑦：教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

評価の視点１：適切な根拠（資料、情報）に基づく点検・評価
評価の視点２：点検・評価結果に基づく改善・向上

教育課程及びその内容・方法の適切性について経済学部では、学部教務委員会、学部自己点検委員会、IP（International Program）運営委員会において定期的に点検・評価及び改善に向けた取り組みが行われている。とくに、学部の選択必修科目（ミクロ経済学、マクロ経済学、経済数学入門、経済と歴史、基礎統計学など）については、アセスメント・ポリシーに基づき評価するとともに、学生がラーニング・アウトカムズ（ディプロマ・ポリシー）に示したさまざまな能力を、当該科目でどれだけ身につけることができたかをアンケートによって調査している（点検・評価項目⑥を参照）。このアンケート結果から、学生の学習状況、履修状況、目標達成度等を確認し、もし不適切、不十分な部分があれば、学部教務委員会や学部自己点検委員会において、その改善に向けての方策を検討し、さらに教授会で審議するという手順を踏んでいる。

直近の経済学部の具体的な取り組みとして一例をあげる。2018 年度の 1 年生（48 期生）の選択必修科目である「ミクロ経済学」（春学期履修）と「マクロ経済学」（秋学期履修）で成績低位（CDE 評価）に位置する学生が相当数いることが判明したため、学部教務委員会での検討の後、関連授業科目に携わる教員を中心に「ミクロ・マクロ経済学基礎力向上対策委

員会」を設置した。当該学生（48 期生）が入学時に受験したプレイスメントテストの結果を教務課から入手し、成績の相関を調べ、他の選択必修科目（経済数学入門）での成績分布や彼らが 2 年春学期（3 セメスター目）に履修する中級ミクロ経済学についても追跡調査を行うなどした。データ収集・分析の作業を各担教員が行うとともに、2019 年 2 月～6 月に計 4 回の委員会を開き、事態の改善へ向けた方策について種々検討され、7 月の教授会で「今後の 1・2 年生への対策案：学部への提案」として報告された（資料 4-X 「ミクロ・マクロ経済学基礎力向上対策委員会報告書」）。

以上のように、教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）に基づいて展開されている授業科目を改善・向上させるための点検・評価については、このような丁寧なプロセスを通じて、PDCA サイクルを機能させるよう努めている。

第5章　学生の受け入れ

（1）現状の説明

点検・評価項目①：学生の受け入れ方針を定め、講評しているか

評価の視点１：学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針を踏まえた学生の受け入れ方針の適切な設定及び公表 評価の視点２：下記内容を踏まえた学生の受け入れ方針の設定 ・入学前の学習歴、学力水準、能力等の求める学生像 ・入学希望者に求める水準等の判定方法

経済学部における、学生の受入れ方針とその公表については、「アドミッション・ポリシー（入学者受入の方針）」を策定し、ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）及びカリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）と合わせて履修要綱及び経済学部ホームページにおいて公開している。
(資料　X-X https://www.soka.ac.jp/files/ja/20190306_111457.pdf)

アドミッション・ポリシーにおいては、求める学生像として、「経済学部が開学以来掲げてきた人間主義経済の理念に共感し、世界の平和と人類の幸福に貢献し、グローバル社会でリーダーとして活躍する意志をもって本学部での学修を希望する学生」「問題発見・解決、さらに論理的な思考・判断・表現に必要とされる十分な知識・技能を修得するための基礎学力を有している学生」「現実の経済社会問題に関心を持ち、自ら考え行動することによって問題解決に主体的に取り組むと同時 に、多様な人々と協働して学ぶ意欲のある学生」を掲げている。また、推薦入試における面接試験での主体性、学習意欲の評価、センター試験利用入試と一般入試での英語の得点配分を高くする傾斜配点等、入試形態ごとの評価の対象とする能力についても例示している。

第 6 章　教員・教員組織

（1）現状の説明

点検評価項目①：大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部･研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

評価の基準１：経済学部が求める教員像が示されているか
評価の基準２：学部の教員組織に関する方針が示されているか。
評価の基準３：教員の任用・承認の基準が示されているか。

経済学部が求める教員像は、教育目標（問題発見・解決能力と論理的思考力を備えた人材育成、グローバル社会で役立つコミュニケーション力を備えた人材育成、世界の平和と人類の幸福に貢献する人間力を備えた人材育成）に掲げた学部教育に積極的貢献し、かつ、各専門分野において高い水準の研究能力を有する教員である。

また、経済学部では以下の方針によって教員組織を編成する。

1. 教員の編成は、学部教育のカリキュラム編成に合わせて柔軟に改変され、特定の分野・学派の「指定席」として教員のポストが維持されることはない。
2. 学部教育のカリキュラム編成に合わせて一つの専門分野に偏ることなくバランスの取れた教員の配置を行う。その結果、原則として、各教員は、演習の他に一つ以上の選択必修科目を担当する。
3. 年齢、性別、国籍において多様性を重視した教員の配置を行う。とくに、原則として、学部教員の 25%以上を、女性教員とする。

さらに、「昇任基準の申し合わせ」（根拠資料参照）に従って、教員の任用･承認を行う。

（2）　長所・特色

かつて、一部の大学では、教員ポストが、特定の分野・学派の「指定席」としてされ、退職する教員の「指名」によって後継者が決まるような慣行が存在した。しかし、創価大学経済学部では、そのような指名を一切廃している。あくまで教員の編成は、学部教育のカリキュラム編成に合わせて行われるものであり、教員の構成も柔軟に改正されうる。その上で、年齢、性別、国籍において多様性を重視した教員の配置を行う点に大きな特徴がある。

（3）　問題点

（4）　全体のまとめ

創価大学は、建学以来「学生のための大学」の理念を掲げてきた。教員組織も、この理念に基づき、あくまで、学生の教育を目的として編成されるべきである。柔軟に改変されうる教員組織は、学部教育のカリキュラムの柔軟な編成にとっても不可欠な条件となっている。

【根拠資料】

昇任基準についての申し合せ
2018 年 1 月 18 日
経済学部教授会

創価大学**経済学部**教員昇任についての「教育研究上相当な業績」および「大学の運営に関する実績及び社会貢献に関する実績」について、次のとおり申し合わせる。昇任に当たっては、創価大学の建学の理念を深く理解し、原則として、以下の「教育業績」「研究業績」「学内業務・社会貢献」のすべての項目の基準を満たしていなければならない。また昇任については、文書による審査報告書を作成し要請があればいつでも公表できるようにしておく。
また、契約教員から任用期間を定めない教員への変更についても同じ「業績基準」を適用する。

I　教育業績
教授・准教授・講師への昇任基準のうち教育についての「相当な業績」とは、以下の４つの条件に相当することと理解する。
(1) 規定に定められたコマ数以上の講義を行うこと。
(2) シラバスの明示、休講の際の補講の実施、公正厳格な成績評価など、適切な授業運営を行うこと。
(3) FD（Faculty Development）活動に積極的に参加し、教育・授業改善に取り組むこと。
(4) 学生などからの授業改善の要望に対して、真摯に取り組むこと。

II　研究業績
１．教授への昇任基準のうち、研究についての「相当な業績」とは、次の各号の２以上に相当することと理解する。
(1)　博士の学位を有すること。
(2)　学術上価値をもつ著書を有すること。
(3)　**査読付の論文を 6 篇以上有すること。**

２．**准**教授への昇任基準のうち、研究についての「相当な業績」とは、次の各号の**２以上**に相当することと理解する。

⑴ 博士の学位**もしくはそれと同等以上の学位**を有すること。
⑵ 学術上価値をもつ著書または、これに準ずる著書を有すること。
⑶ **査読付の論文を 3 篇以上有すること。**

３．講師への昇任基準のうち、研究についての「相当な業績」とは、次の条件を具えることと理解する。
⑴　博士の学位**もしくはそれと同等以上の学位**を有すること。
⑵ **査読付の論文を 1 篇以上有すること。**

III　学内業務・社会貢献
教授・准教授・講師への昇任基準のうち、「大学の運営に関する実績及び社会貢献に関する実績」とは、以下の条件に相当することと理解する。
⑴ 学部、大学の役職・委員会・入試関連やオープンキャンパスの担当などの業務を、責任をもって行うこと。
⑵ その他、大学の研究教育環境の改善のために顕著な貢献があった場合、もしくは、大学教員として、社会貢献について顕著な実績があった場合は、これを積極的に評価する。

その他「年数基準」について
昇任に必要とされる教歴年数は、昇任基準に定められている前段の年数によることを本則とするが、教職以外の経歴を有する者については、後段を適用することができることとする。ただし、経歴の相違によるアンバランスの生じないように考慮する。

第 7 章　学生支援

（1）現状の説明

点検・評価項目①：学生が学習に専念し、安定した学生生活を送ることができるよう、学生支援に関する大学としての方針を明示しているか。

評価の視点 1：大学の理念・目的、入学者の傾向等を踏まえた学生支援に関する大学としての方針の適切な明示

経済学部における、学生支援の方針の適切な明示については、

点検・評価項目②：学生支援に関する大学としての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。　また、学生支援は適切に行われているか。

評価の視点１：学生支援体制の適切な整備
評価の視点２：学生の修学に関する適切な支援の実施
評価の視点３：学生の生活に関する適切な支援の実施
評価の視点４：学生の進路に関する適切な支援の実施
評価の視点５：学生の正課外活動（部活動等）を充実させるための支援の実施
評価の視点６：その他、学生の要望に対応した学生支援の適切な実施

【視点 1 について】

まず 1 年生に対しては、初年次セミナー担当教員がアドバイザーとしての役割を担っており、各セミナーに 1 名ずつ配置される Student Assistant と共に履修や学習の進め方等を支援している。経済学部では、2 年次秋学期から専門演習が始まるため、2 年次春学期までは初年次セミナー担当教員がアドバイザーとなり、2 年次秋学期以降は専門演習の担当教員がアドバイザーとなる。加えて、経済学部には独自の教育ラウンジ（FEEL）が設置されており、経済学部生はそこに常駐するスタッフにいつでも学生生活全般に関する相談を行うことができる。また経済学部事務室には、大学職員が事務長として配置されており、そちらでも学生は支援を受けることができる。以上のように、経済学部では、アドバイザーとしての教員、FEEL スタッフ、そして経済学部事務長による支援体制が整備されている。

<u>参考資料</u>

- FEEL について：https://www.soka.ac.jp/economics/feature/feel/

【視点 2 について】

- <u>学生の能力に応じた補習教育、補充教育</u>

経済学部では、ミクロ経済学、マクロ経済学、経済数学入門、基礎統計学を必修科目に設定している。経済数学入門は、入学直後に行われるプレースメントテストの数学の点数に応じてクラス分けされ、個人の習熟度に応じた教育を受けることができる。その他の専門科目

に関しては、単位を取得できなかったり成績が振るわなかったりした学生向けに、再履修クラスを設けている。この再履修クラスは、正規の授業が行われる学期の次の学期に設けられており、少人数のクラスで扱う内容を絞ることにより、必修科目の内容理解を促す仕組みを整えている。また、「グローバルな経済社会に貢献するリーダー」「地域社会に貢献できる人材」を育成するための特別プログラムとして、2018 年度より Honors Program in Economics（以下、HOPE）を開設している。このプログラムは、国内外の一流民間企業・大学院のみならず、世界銀行などの国際機関への就職を目指す学生を対象している。

参考資料

- HOPE について：https://www.soka.ac.jp/economics/feature/hope/

● 留学生等の多様な学生に対する修学支援

経済学部には、英語で全ての単位を揃えることができる SUCCEED プログラムがあり、留学生が所属している。彼らの殆どが日本語を話すことができないため、ガイダンスでの通訳や日常生活における相談を受ける教員を配置している。

参考資料

- SUCCEED プログラムについて：https://www.soka.ac.jp/economics/feature/succeed/

● 成績不振の学生の状況把握と指導

成績不振の学生に関する情報は各学期の最後に大学から情報を提供される。その結果を基に、先述のアドバイザー教員が次学期の最初に個別面談を行っている。指導面については、クラブ・部活、アルバイト、授業への出席、課題の提出、生活リズム等の観点に沿って聞き取りを行い、成績不振に陥った要因の特定を試みている。聞き取り後は、履修科目の推奨を行ったり、学習支援課における学習支援サービス（オアシス・プログラム）への橋渡しを行ったりしている。

参考資料

- オアシス・プログラムについて：https://www.soka.ac.jp/seed/activity/support/

● 留年者及び休学者の状況把握と対応

✧ 留年者

経済学部では約半数の学生が留学に行くという事情があり、それらの学生の多くは 1 年間在学期間を延ばし 5 年で卒業する。このケースは、学生による自主的な留年であり、特に懸念すべき点はないように思われる。その他に、非自発的に留年せざるを得ないケースとして、語学単位の未修得が挙げられる。経済学部では、3 年次の終わりから 4 年次の初めの時期に、卒業に必要な語学の単位を修得し終えていない学生に対して、アドバイザー教員から注意を促している。

✧ 休学者

先述の留学経験者は、卒業時期の調整のために 4 年次秋学期か 5 年次春学期を休学することが多く、このケースに関して特に懸念すべき点はないように思われる。その他のケースで見受けられるのが、精神の病気による休学である。このケースにおける状況把握は、アドバイザーである専門演習の担当教員(2 年次以降の場合)が主に担っているが、具体的な症状や病気の進行・回復度合いについて十分な情報が得られないこともある。こうした学生への対応であるが、学内に設置されている学生相談室(臨床心理士が在籍)や学外の医療機関においてカウンセリングを受けることを勧めている。

【視点 3 について】

● 学生の相談に応じる体制の整備

※ 大学が提供する支援体制と同様である。

【視点 4 について】

● 学生のキャリア支援を行うための体制（キャリアセンターの設置等）の整備

経済学部では、1 年次の終わりに受けた就業力テストの結果を基に、長期休業期間ならびに次セメスターの計画をマイマップに記載させている。マイマップ作成にあたり、前セメスターに立てたマイマップ・計画を振り返り、休み期間における過ごし方と次セメスターへの取り組みについて、優先順位を明確にし、学業および課外活動・アウェイ体験等について具体的に記すよう指導している。その際、積極的に伸ばしたい就業力とそれを実現するための取り組み（留学やインターシップ等）にも触れ、両者の関連付けを図っている。マイマップ作成のタイミングは「2 年次春学期終わり」「2 年次秋学期終わり」「3 年次春学期終わり」であり、アドバイザー(演習担当教員)が最多 3 回のマイマップ指導を行うことになる。

【視点 5 について】

学生の正課外活動を充実させるための取り組みとして、以下の 3 点が挙げられる。

● インターナショナル・プログラム海外研修

インターナショナル・プログラム（以下、IP）海外キャリア研修では、経済学部が主催し、IP 受講学生を対象に、シンガポール、または、カリフォルニアにおいて約 10 日間の海外グローバル研修を実施する。このプログラムは、IP を受講している学生の英語スキル実践の場として、またグローバルな視点で就業意識を高めることを目的にしている。

参考資料

- IP 海外研修について：https://www.soka.ac.jp/economics/feature/overseas-training/

● 東北復興スタディツアー

経済学部では、東日本大震災の被災地のケーススタディーとして、宮城県南三陸町を訪問し復興の課題を体感するスタディツアーを実施している。現地の農業支援ボランティアも

経験する中で、このツアーで経験したことと自身の学習に結びつけるとともに、自身の成長へと繋げ、就業力の向上への契機とすることが目的である。

参考資料

- 東北復興スタディツアーについて：https://www.soka.ac.jp/economics/feature/volunteer/tohoku-study-tour/

● インターンシップ

経済学部では、海外インターンシップと国内インターンシップをそれぞれ提供している。海外インターンシップは、「香港・インターンシップ・プログラム」および「クアラルンプール・インターンシップ・プログラム」であり、春休みの 3 週間から 4 週間を使ってグローバル社会で活躍するための就業力・英語力を高める機会となっている。また、国内インターンシップとして「東北復興インターンシップ・プログラム」が提供されている。東日本大震災の被災地にあるホテルでインターンシップをすることにより、復興の課題を体感し、体感した復興の課題を自身の学習に結びつけることが狙いである。その上で、産業界のニーズに対応した人材になるために、どのような就業力を高める必要があるかを発見し、人間的成長の契機としている。

参考資料

- インターンシップについて：https://www.soka.ac.jp/economics/feature/internship/

点検・評価項目③：学生支援の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

評価の視点１：適切な根拠（資料、情報）に基づく点検・評価
評価の視点２：点検・評価結果に基づく改善・向上

【視点 1 について】

毎年、年度の終わりに、必修科目であるミクロ経済学・マクロ経済学の単位習得状況、および 1 年生の成績不振者の割合を確認し、1 年生の学習への取り組み方や専門科目の内容の理解度を教員間で共有している。

（2） 問題点

現状の問題点としては、以下の 2 点が挙げられる。

● 日本で就職を希望する留学生への就職活動情報の提供が不十分である点

2016 年に入学した SUCCEED 1 期生のうち 3 名が日本での就職を希望しているが、大学

生活の中でキャリアに関する授業を履修しておらず、就職活動の仕方や自身のキャリア形成について迷い、手探りで活動している状況である。特に学生から上がっている声として、以下の点が挙げられる。

✧ これまでキャリアに関する授業等を履修してこなかったため、4 年生になってどのように就職活動に取り組めば良いのか分からない。

✧ 就職活動・キャリアに関する情報をどこで入手できるか分からない。

✧ キャリアセンター等で英語でのコンサルティングをして欲しい。

2018 年から英語による「キャリアデザイン基礎」が開講されているが、留学生や担当教員への周知は不十分である。また、日本人学生に向けて提供されているような豊富なコンテンツを伴ったキャリア科目が留学生向けには開講されておらず、留学生に対するキャリア教育・就職活動の支援体制は十分に整っていない。

参考資料

- 第 3 回経済学部教務委員会議事録より（2019 年 6 月 7 日）

● <u>就業力向上に対する計画の作成・取り組みが効果的に行われているかどうかの検証が不十分である点</u>

経済学部生は、1 年次秋学期の終わりと 4 年次（もしくは 5 年次）の秋学期の初めに就業力テストを受験する。これにより、大学での学びを通じてどの就業力がどのくらい伸びたかを測ることができる。しかし現状では、リアセック（本学が就業力テストの発注を行っている会社）により提供される報告書を通じてテスト結果を比較するだけに留まり、どのような取り組みがどの就業力の向上に繋がったかという分析はなされていない。学生の就業力育成に関して教員が有する知識には限りがあるため、既に蓄積されている過去の就業力テストの結果を分析し、その内容を教員間で共有することが望まれる。

第 9 章　社会連携・社会貢献

（1）現状の説明

点検・評価項目②：　社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか。また、教育研究成果を適切に社会に還元しているか。

評価の視点１：学外組織との適切な連携体制
評価の視点２：社会連携・社会貢献に関する活動による教育研究活動、国際的な発信の推進
評価の視点３：地域交流、国際交流事業への参加

＜学外組織との適切な連携体制＞

経済学部においては、地域・産学連携センターを通じて、行政や産業界、教育機関などと連携・協力する体制を整えている。国際交流については、研究開発国際連携推進センター、グローバルコアセンターを通じて連携・協力している。

＜社会連携・社会貢献に関する活動による教育研究活動、国際的な発信の推進＞

社会連携による教育活動については、八王子市の「八王子学園都市大学」に 2018 年度は経済学部から 6 科目・1 講座を提供した（2017 年度 10 月度・大学研究評議会）。

国際的な共同研究活動については、2018 年度に国際的な学術誌に発表された論文は 3 編で、そのうち国際共著論分は 2 編であった。

https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S0305748816301554

https://www.sciencedirect.com/science/article/abs/pii/S2452306219300048

https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/03610918.2018.1554120

＜地域交流、国際交流事業への参加＞

八王子市は 2017 年 8 月 28 日に、独立行政法人・国際協力機構（JICA）と 3 年間の業務委託契約を結び、ミクロネシア連邦のチューク州に市職員を派遣している。この事業には本学の経済学部の教員および学生が協力し、大量のごみが家の外や海に放置されるなどの課題を抱える太平洋の島国・ミクロネシア連邦の状況改善に取り組んでいる。

https://mainichi.jp/univ/articles/20170831/org/00m/100/014000c

産学連携講座「社会貢献と経済学」では、東北の復興をテーマにした授業を行っている。また経済学部では、年に 4 回、東北復興インターンシップ・プログラムを実施している。

https://www.soka.ac.jp/economics/feature/contributions/

https://www.soka.ac.jp/economics/feature/internship/tohoku-ip

（3） 長所・特色

経済学部では、環境問題や東北復興に経済学の強みを活かして、社会に貢献している。

（4） 問題点

国際共著論文を増やすためにも、国際的な共同研究ネットワークの形成が課題である。

（5） 全体のまとめ

経済学部では、学問分野の特性を活かした社会貢献に十分に取り組んでいる。研究活動の国際的な発信が今後の課題である。